「亡くなった方々の心をたずねる」

令和2年7月豪雨から1年　追悼法要営む

熊本教区、熊本県仏教会が共催し人吉別院で

昨年7月に熊本県などを襲った豪雨災害から1年となる7月4日、熊本県人吉市・人吉別院で「令和2年7月豪雨」物故者1周忌追悼法要が営まれた。熊本教区（宮川善裕教務所長）と熊本県仏教会（伊藤公明会長＝本願寺派・西音寺住職）の共催。2016年4月の熊本地震を機に被災者支援には宗派を超えたつながりが必要として18年に結成された熊本県仏教会は、会則に「『令和2年7月豪雨』の物故者の追悼」を掲げている。

「令和2年7月豪雨」は日本各地に被害をもたらしたが、特に大きな被害を受けた熊本県では67人（関連死2人を含む）が犠牲となり、2人が行方不明のままとなっている。被災家屋は7400棟におよび、今なお3700人近くが仮設住宅での避難生活を余儀なくされている。

市内の中心部を流れる球磨川が氾濫した人吉市では関連死1人を含めて21人が犠牲になり、3000棟の家屋などが浸水被害に遭った。近くを球磨川が流れる人吉別院は境内が1㍍冠水し、門徒5人が亡くなった。災害後、別院には県内外から食料、飲料水、日用品などが届けられ、これらを被災者に提供するなど支援の拠点となった。

法要には遺族や教区内の僧侶、寺族、門徒のほか、人吉市の松岡隼人市長、熊本県仏教会と全日本仏教会の関係者、本山の晨利信社会部長など70人が参拝し、豪雨災害の犠牲者を追悼した。法要の模様はユーチューブでライブ配信され、全国で158人がオンライン参拝した。

河村信昭輪番の導師で阿弥陀経作法をおつとめし、読経の中、参列者が焼香した（写真）。続いて布教使の大松龍昭さんが法話した。法要後、熊本県仏教会の伊藤会長が挨拶し、「追悼とは、亡くなった方々のお心をいただく、お心をたずねるということ。亡くなられた方々の思い出や教えを一つ一つ確かめ、それぞれの人生に生かしていくことも大事な追悼のご縁」と語った。

◇

法要後、参拝した別院門徒の遺族に話を聞いた。

西英雄さん（当時83）と妻のタヅ子さん（同74）は、球磨川のすぐ側にあった自宅が流され亡くなった。英雄さんの妹、右田栄子さん（82）は「普段から水が来たらすぐ逃げると言っていたのに。あの日に限って家の中にいた。今でもなんて言っていいのかわからない」と話し、大粒の涙を流した。

大岩ヒサエさん（当時99）は入所していた球磨村の特別養護老人ホーム「千寿園」が濁流に襲われ、他の入所者13人とともに犠牲になった。三男の大岩和夫さん（75）は「毎日お仏壇にお参りしては母のことを思い出している。この1年はとても一言では言い表せない…。寂しい。でも、少しは落ち着いたかな」と言葉少なに語った。

（8面に関連記事）